

希望を耕す

若い世代の刺激2

東京大学教授・建築学

松村秀一

Shuichi Matsumura

日本建築学会の「グローバル人材育成事業」

著者は、昨年六月から二年間の予定で（二社）日本建築学会の副会長を務めている。主な担当は情報化と国際化。そのうちの国際化について、中島正愛前会長から「海外事業の比率を高めざるを得ない日本の建築業界を担う人材育成に関して、学会としてできることを提案してほしい」との指示をいただいた。研究分野での国際化については、学会で既に始めている事業も複数ある。むしろ、これからの実務分野を担う学生の、海外業務への関心を高めるような事業を考えてほしいということだった。

その後、中島前会長や学会事務局との検討を経て「グローバル人材育成プログラム」を始めることにした。具体的には「世界で建築をつくるぞー！グローバルな建築デザイン・マネジメント・エンジニアリング分野への入門」と題して、二日間、世界を舞台に各方面の第一線で活躍している方々に講演とグループワークの指導を担当していただき、全国の大学・高専から選抜された意欲のある優秀な学生に集まってもらうことにした。

五名のプロによる講演とグループワークの課題

この初の試みは、去る八月二十四日、二十五日に東京・建築会館ホールで実施された。講師陣は五名。全国各地から選抜された参加学生は五〇数名。日本人だけではなく、留学生も一〇名程度参加してくれた。

講師陣の一人目は、建築家として世界各地で数多くのプロジェクトを手掛ける隈研吾さん。中国、フランス等でのプロジェクトの経緯を具体的に紹介する中で、目指す方向を共有できる発注者とであれば、困難があったとしても最後まで並走する覚悟で臨むというご自身の心構えや、地域固有の材料や技術の状態で合わせる形でそれぞれに最善の建築を求めることの必要性等を伝えてくださった。講義後のグループワークの課題は「日本の木材が海外で売れるようになる契機となる建造物のデザインを依頼された。どこに何を建てるか」であった。

二人目は、東南アジアやアフリカで、スラムに象徴される都市問題に取り組んできた志摩憲寿さん。都市人口の爆発的な増加とそれに伴う問題、他方で将来の人口減少と過疎化が現実視

できるアジアの国々の実情等を教えてくださった。その上での課題は「ジョグジャカルタに計画されている新空港の周辺に二〇万人規模の新都市を計画せよと言われた。これから二〇五〇年までにどういう都市をどういうプロセスで形作るかアイデアを提示せよ」というものだった。三人目は世界各地に拠点を持つエンジニアリング企業アラップの小栗新さん。同社の研究チームが整理した世界の都市の課題一〇〇を紹介した後、グループごとに海外の都市を一つ選び、その都市が直面する課題を特定し、その解決に日本の建築業界だからこそできる貢献はどのようなものかを議論してもらう形をとられた。

四人目は、国際的に最も知られるベトナムの建築家ヴォ・チョン・ギアさん。日本で建築を学んだギアさんは、経済成長だけを重視する風潮への根本的な疑問を投げかけた上で、自らの作品を紹介しながら、瞑想を重視した自身の仕事への取り組み方を説明してくださった。グループワークの課題は「ベトナムのギアさんの事務所で一年間働けるとしたら、どんなことを体験・習得したいか、またそれは自分の将来にどのような役に立つか」というものだった。

そして五人目は、日本のゼネコンの技術者・

経営者として二〇年以上も海外事業に取り組んでこられた鹿島建設(株)副社長の小泉博義さん。同社による実績の紹介を交えながら、学生が知らないような、世界の建設市場動向、日本の建設業による海外事業の多様さ、日本の建設業の強み等を教えてくださった。海外事業では「鳥の目、虫の目、魚の目」が重要だという自説を紹介した後に出されたグループワークの課題は「二年後にシンガポールで学校を作ることになった。グループでどういうチームを構成し、この二年間で何を準備するか」というものだった。

グループワークとメンター

五〇数名の学生は、出身大学や学年、専門分野が偏らないように、五〜七名程度のグループ八つに分けられ、いきなり初対面同士で上述のような悩ましいグループワークに取り組みされた。それぞれ発表までの時間は四五分か与えられない。しかし、案ずるより産むがやすし。私には到底答えの見当もつかないような難しい課題を、どのグループも見事にこなし、なるほどと唸られるような最終発表にまとめ上げていた。

この学生たちの驚くべき成果には、メンターの方々の貢献も大きかった。ゼネコン、設計事

務所、エンジニアリング事務所、住宅メーカー、大学等に所属し、海外での経験を豊かに積んでこられた技術者や経営者たちが、一グループに二名ずつ相談役としてみっちり付いてくださったのだ。実に贅沢な布陣であった。

あの成果の半分ほどは、世界をよく知るこのメンターの方々の指導の賜物と思って聞いているが、二日間の最後に一六名のメンターの方々の全員から感想をお聞きしたところ、そうでもないようだった。殆どのメンターの方々は、学生たちの積極性や自主性、そして知識の豊かさに驚かされたと、異口同音に語っていた。こんな若者が全国にこんなにもいるのだということ、大変心強く思ったという感想も多かった。

形式ばかり整ってしまった今の就職活動ではなかなか発見することの難しい若者の持つ豊かな可能性が、期せずして再認識される形になった今回のプログラム。多くのメンターの方々が、企業社会に属さない若い世代と接する機会を日頃は全く持てないともコメントしていた。

若者を育成する機会を作ることでも大事だが、若者の可能性を発揮する場を作ることこそもっと考えねばならない。そう強く感じさせられた二日間だった。